楊柳文庫

拾貳

へ 13
3330
11

へ13
3330
11

茶機榮

大正十八 九月 寄
本大学出版部 贈

新撰陽明文庫巻之拾弐

目録

一 移北三年江戸表へ出る事
表敬の為め江戸の事
附おくに・冨市と宴遊の事

武道陽和文庫巻之拾弐

移殿三年　江戸出火年

元禄の頃　隆家の事

所あり　祭礼と参道の事

あるも　移殿三年　卯の年号を

改世　と　幸　江戸　着

まづ　祭礼　芸所　卯酉の位

家く年経りて
のの屋ちかくなりぬ
事ども毎ごとに仏事
豊秋の年ごろ
を供じて古仏とやすらし
とふものの世の人のおも
うくを悔り彫
ちかくなりぬ

とのるかに元掛に
そくしぶりの後家どもの海世
つまて身女を捨出世の父こ
をうう山いと口ぐるる流る
を出て三年ちひよ花ど流き
ちぐしのきわて辰年
ぶまづうくるる捨をりふて早
くまうちちりうるも

あゝ仲どの、命の分ど合てし
ゆうべ半時の間の生死も定わ
ざうよ長生て仕半ぞや
生かのうらべあの印ぞのうら
し人のうらきを言てて
人をうらむの悪の
て命をきまを組と組
ち家をうくの行くの

物語をして夜半過て
いりづうくの下て家中
しづまりてゆうべ四ツ時
まれとうよ寄てうれば
あゝ仲さまゆい金人へ書
ちうわてうちうくのうち
命命うく長口の後古とうに
まうを見しづを後家敵を仕

身に毒なく毒なしとみて
毒をもたべ引きたい時分みては
きりのきれの例みてつとめ
のつり目四番四年みてのつり
まよ行てもの食へきの星数
つきたれのもとづれもの写す
りとなりくのとてなれば三年
いくらい星数もきりしあい女姓

ものくきりきれを
あるきりきりものとてを
きりきりみても所酒食へ冷よい
呼やの強食よりあがきりし
きりきりをきりば肩尾紙
毒云きりみてきりをたべ
祝前歌を行て食へどの
紙尾のきりをきりし雪

君をかつがしまと者和
ゝ作を宮ゝて きゝ和ゝ衆
ゝゝゝゝをいゝ毎もしゝて ゝゝを
ゝゝゝ 芋推布ゝ潮雲寺へ
ゝ作ゝ 鳴の寺へゝゝ
つゝゝを作ぎゝ地よ作ゝて生ゝ
へゝ和ゝこゝゝはむゝも
歌きゝしがゝゝゝ 船を上

て奏ゝむゝゝゝは寺
ゝと者和の巳ゝ見ゝ一和ゝ
巳流和をゝ和ゝゝゝ
一口又ゝゝゝゝ滅合仕ん
ゝ和ゝゝゝの巳ゝ一言の
ゝ仕巳ゝゝゝゝ今文流悔
仕ゝゝ後い巳図
の巳仕和巳ゝ亀ゝ和書

王くの御学恩忘るべからず加之
一旦りにても時節を不怠
せ御師匠の御恩を報ずべく
百合一の御恩も報じがたう
んまのこ楽しみよりて
しからば今日の身のうちを
もて御慶してはかりおもひ
ころのゆく末ははかりがたし

またふく御當家へ参り御家
よりのまきを取りなば御仲
まゑはいづれく御下しおきれ
のや哉わが下さば猶さら敬の
実の目をも頌とぞよせはひく恩
捐つくぐ孝くのまず縁の六を
達して第一かなず家業を忘れ
を忘るまじくる仕業を

なをしかるべしと比丘尼来給
是等もそのおこりは平家が敵
なれば中にも平家の
末にて切腹仕り仕るべし
それぞれなれども何から敵の
生死なかばしかるべしなんどあれば
よりて敵の一家を尋ねし
首を討あげし

首をえて修羅の妄執をはらさせ
給ふこの上にて家来ども忠に切腹
仕り泉下にて御供仕るべし
もし二年の其内に敵の行方
未だしれざるときは自害し
して果たしとありつるとも
敵を討てまつしまへ仕て
此由を伊豆作法の墓にふかし

きてうちうえ年高仲の女性を
遠ひ毎宮菊侍の出貴うよ
仰合点ちかくうちうよあれ
うち陽よ高の生うもも
ぎて中うえび日仏の出年性よ
も仰合点まの百ケ日のうぎうよ
中紀きうの仏年うや是
うの沼中い一番合てしまう

も移れども歌を
うは遠ケ歌の首うづく
て波羅の出家桃をううセ
中うと」とううぐうよ
沉むうぐうう高
るのうちで赤の
あれうう
三年の幸をうう

表

あるひ百姓と喜兵衛の事

あるひ三年を経て今はかの養子

をうしなひまづ身のなげきをうど

りしと森市郎右衛門町よりさきと

しのうらぐ[illegible]ばかりなれば是へた

ゝ新町と[illegible]川町[illegible]

[illegible]の事をかれば[illegible]

[illegible]三年があがりきき事を

[illegible]

[illegible]三年も大[illegible]

[illegible]と則

[illegible]武[illegible]の裏長屋をかりて

町[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ら〳〵ちうぐうこそ
ち一ぢ行の手又ゝが作者
あがら歌又ゝの作がを吟
事ちぐば無るがりやち
ら〳〵と一手行くちを作て全
事を事ひちうくよ
ゆちは一口又ゝのは出
年りづ自の後ら徹食ち集て

又ゝをそじわ名ゝ
をりくまちをちりよ沙
法ちが又ゝ作制
ちくゆるも沙ちる
きて生矢もりや
有ひり〳〵山百ぐくちや
山ちくちの名ゆ
とりのがちる三手ちて山の

うちまかりしかれどもさかゆき
此所にて近道しそれより
先は青山道へ参り行程一里余
左へ参れば老人の侍り
より又一里の後ともしへは新宿
寺備を待申しまゐり一家ぞ
町内は四方の辻をまゐりしけ
きくりうらへ参りしや

其後は一句の発句あつてまた
きゝて三千も是非なくその
月の家にまゐりかくして
楽日より又く菩提へまゐり
神前も又給ふとしてぬるが
正面由来をかたりける
身も三十は海道までに
下谷深川山の手町迄

そで成る中にたゝをくぐり
て多ぐ稀なれども見ちがゝを
きもちくゝ多のよそめびとして
三年もゆくこゝちして
はるゝ春のはゆくすぎうゝを去
みてもいつまでゝ幽びまよう
哭るゝ能うき仲をたのゝを辻
のぐをうつぎてゝ東川

一於里ごゝしの家を多ぐる
て五月雨ゝを仕ゝ
あどして西東をきゝのい
をゝの歌をくやまゝを見の
ゝ鳴ゝ言葉の集のまゝを
幽を付て多ぐ○ゝれば
ゝれ家物の若ものゝ
作るゝくゝれゝゝ

しかるに合る候ほどに
りとて今世ならぬぞくし
あやしきことは又古の女房紫
式部伊勢と清少納言今子
をとめし出奔して育さる
よひ紫式部しらば上総の長官
とりよ所よきをしれ知るべのを
よまりせえぞらし諸とこ紙

よりつきてあいぞらがこまへや
百首の今るも彼是すつかりから
おもむずかりよちりされば
くしして新今集をもって切
らば先祖をうめるとも早晩
おし慈角に只業をしけ
るよてりるい盤名の地なれ
いかしこよ稼りきんぞ家業

きて一生をあの業よりて
きしとちへ赤後してそれよ
をあの郷へ赤ものを紀ける
とあれよ仏和尚元本異用
ちるあとてもて寺もよく順
ち体縁も赤真よあ集ぐ
ぶを指南して成ちよ
今よい法山ちへきぐ年

いきそぐまぐの業くをあ
帰年月日をあちちぐみた
いやくをへをけてちそこ
あと流浪して赤今中へ
如来の半い年をしもせば
してそりを富市を云ふ
ちへそぐ仏和尚
の和尚暑へ出入し

ちうぐ高く合掌の行うゆて拝る
い多都を作る東市場ぐ流の
都ぶ〜めこ味せしたるく
後きたるく声ともきあびお
き多音ちまよ如うて食
都ぐ生り匂ぐ様言
葉をもうてたれうしよう
せちうぐ自浄仏さうて

仏助うく粉のつ平ども
ゆうう和尚様ぐ食べと
仏意して帰りう
ゆど多都もいうを生てく
らしとする仏助中よ宗
食も文多ばりと今食い
浄て呼ちたく仏うと
ちきうまいゆ如意しを

出しかしにおまへハ不用心晴
くうてよろしからんと夫婦
ゆうらも留けるかぞ多郎出て
さうらば此世縁にあれさらしと
まようしてまさく酒にあうり
云へとも連合ふみて別としく
吞けるかうじの修助れおれるに
ゆめらしてあ徒そこにたのまれ

身しさ緑もおかくにも家め
ろう此に多郎あかこのが
流のきようり彼是せずしきを
無のまかりにをかりて袖をを
別きかれしがまづりやまさんを
流れのまて流石尋のそて家
まば逃まじくし妻柳の
いそぎ出もうじれそめそれよう

も次第(しだい)に深(ふか)くなりて伝助(でんすけ)が気象(けしやう)を
出しかね去段(きうだん)して或夜(あるよ)伝助(でんすけ)が寝間(ねいら)へ
しのびこみ六散し〆殺(しめころ)し金子(きんす)の金
をうばひ当郷(とうごう)のかくれもなき逆罪(げきざい)しが
故(ゆゑ)御手(よぶり)の罪(つみ)の果(はて)にとゞまる人の手(て)にかゝり
なり

武居陽柳文庫主之模製

加り本と人の
女房者いやな
ちんかついだがり
け女加り

赤
本
表紙
山